国有林と地域との新たな関わり方についての一考察
～花巻市における山間地域に眠る歴史を事例に～

岩手南部森林管理署　森林官（石鳥谷森林事務所）髙城　允

1　はじめに

当森林事務所が所在する岩手県花巻市の山間地域は、人口減少、少子高齢化が見受けられる。また、林業の消長等により山間地域との関係の希薄化もみられる中で、国有林と地域との新たな関わり方について検討する必要性を考えていた。一方、花巻市は宮沢賢治等に由来する「郷土の歴史」に対する関心が高い地域であり、それらに関連する歴史的遺構等の存在についても、日頃の業務等を通じて、ある程度見聞きしていたところである。

そこで本研究は、山間地域に残された「郷土の歴史」に着目し、歴史的遺構等の存在を活用した国有林と地域との新たな関わり方について考察することを目的とした。

2　研究の方法及び経過

本論では事例として、管内の葛丸川山国有林にかつて隣接した「畑（はた）集落」を選定し、各調査を行った。今はダムに水没し所在しないが、現在もその出身者の存命が確認できており、調査の緊急性を考慮した（写真１）。

写真１　かつての畑（はた）集落（現：葛丸ダム）

また、調査方法は次の通りとした。

① 文献調査（図書館での調査、及び各機関へ出向いての資料収集）

② 聞き取り調査（主に畑集落出身者２名、郷土資料出版にも携わる地元有識者２名から）

③ 現地調査（国有林図面、GPS、デジタルカメラを使用。現地状況の図示と写真保存。）

④ 地域の関係者（畑集落出身者、地元有識者、花巻市、ダム関係者、花巻市森林組合）との現地での意見交換会により、所要の資料等を収集する。

3　研究の結果

上述の各種調査等から、以下の通り明らかとなった。

（１）畑集落の成り立ちに関して、西暦 1200 年頃に奥州藤原氏一族が落ち延びてきた等の言い伝えがあること。（聞き取り・現地調査より）（写真４、５、図１）

（２）国有林での造林や炭焼きにより現金収入を得ていたこと（聞き取り調査より）

（３）地質調査に訪れた宮沢賢治を「畑集落」の青年が山案内し、炭焼き場の近くで共に野営したこと（聞き取り・現地調査より）（写真６、７、図１）

（４）硫黄鉱山の存在と畑集落の関わり（聞き取り・現地調査より）（写真８）

（５）意見交換会では、様々な角度からの質問があり、地域で立てた集落案内板の修正点等についても確認できた。（写真１０）

（６）前述した各調査について、現地確認できた箇所の位置を特定し、図面かん入を行った。（図１）

４　考察

（１）畑集落の成り立ちについては諸説伝えられているが、今回の文献調査及び古文書の消失という聞き取り結果からも、確実に断言できる情報は少ないと考える。しかし、先祖に関する言い伝えが現在まで継承されていることや、現地調査により確認できた歴史的遺構等の存在を記録することは、集落が育んだ歴史、文化的側面を風化させないために必要ではないかと考える。

（２）畑集落と国有林とのつながりについては、今回の調査によって深かったことが明らかとなってきた。寒冷な気候条件である土地柄において、作物以外の収入として国有林の造林や炭焼きによる現金収入を確保できたことは、国有林の存在が集落の存続に大きく影響していたと考えられる。今回の調査により、畑集落と国有林の深いつながりは、立地的側面および経済的側面によってもたらされたものではないかと推測した。

（３）畑集落と宮沢賢治に関する情報については、文献記載が乏しく、また現地状況については全く整理されていない状況であった。今回の調査によりその場所をカラー写真に収め、図面にかん入したことは、地域情報の整理に貢献することができたと考える。

（４）硫黄鉱山については、今回の文献調査ではその存在を確認することができなかった。しかし聞き取り調査では、当時の様子を記憶する方が数名いたことから、本研究により硫黄鉱山の存在を整理することは地域にとって意義のあることだと考える。

（５）意見交換会では、集落出身者と地域の関係者が意見を取り交わす機会を創出することができた。畑集落の歴史・文化が現在でも地域に影響を与えていることや、今からでも地域一体となった新しい取組を行える可能性を示せたことが、今回の意見交換において評価できる点ではないかと考える。

５　総論

山間地域の歴史的遺構等を活用した取組により、以下の可能性を示すことができると考える。

（１）花巻市の林務担当以外の課（例えば賢治まちづくり課）や、歴史、文化系統の民間有識者等とのつながりが増え、新たな地域ネットワークを構築できるのではないかと考える。このことにより、今まで話し合われることの少なかった、山間地域に眠る「郷土の歴史」に対する価値や必要性を、地域一体で改めて議論する機会を創出できると考える。

（２）地域に眠る情報を改めて整理することで、国有林野職員の地域理解をより深められると考える。地域理解が深まることで、我々の業務においては、事業実施にかかる問題点等の事前洗い出しや地域意見を反映した施業へとつなげることが今まで以上に可能となり、今後の森林施業に役立てることができると考える。そうすることで、

施業実施にあたっては、異動の多い国有林野職員だけで山間地域に眠る歴史的遺構等の必要性を判断することなく、地域一体で山づくり・地域づくりを行うことができると考える。

（３）国有林のフィールドを活用したふれあい活動においては、自然、花草木などが主体である自然を学ぶための森林環境教育に加えて、地域・歴史を学ぶための教育を取り入れることができるのではないかと考える。郷土に詳しい方を地元講師として招待するなど、新たな地域との関わり方についても期待できると考える。また、地域ネットワークと連携することにより、国有林野職員が地域活動へ参加するなど、国有林と地域が互いに関係を深め合うこともできると考える。

このようにして、国有林の更なる地域情報の発信・共有により、国有林の地域貢献をより有効に発信できると考える。

今後も、今回のような取組を通じて、山間地域と関わる機会を今まで以上に作り出し、国有林の地域貢献を更に発信していきたい。

写真４　大石権現（奥州藤原氏の一族が落ち延び、たどり着いたと伝わる場所）（葛丸川山国有林６１６林班内）

写真５　集落近くに大石権現を祀った祠（葛丸ダム広場の集落案内板）

写真６　大正７年５月上旬、宮沢賢治と畑集落の青年が共に野営したと伝わる場所（民有林内）

写真７　同年秋頃、再訪した宮沢賢治に前述の大石権現を案内し、近くで共に野営したと伝わる場所（国有林内）

写真８　硫黄鉱山に関する跡地（葛丸川山６０７林班内）

写真９　現在の硫黄鉱山の入口付近

写真１０　葛丸ダム広場での意見交換会（かつての畑集落所在地）

図１　1/2 万　国有林図面へのかん入（例）

参考文献

石鳥谷町史、下巻（1979） p345,348,349,357,957,1130,1131
いしどりや　歴史と民俗　第１１号
私達の郷土
葛丸川と紫波町
新校本　宮沢賢治全集　第１巻　p262
校本　宮沢賢治全集　第１４巻 p493

賢治先生と石鳥谷の人々　板垣寛　p48-50
いわてのお寺さん　北上・花巻とその周辺